

飛鳥寺塔心礎に埋納された 真珠小玉

奈良文化財研究所がおこなっている飛鳥寺塔心礎出土品の再整理作業において、白色不透明な材質不明の小玉が少なくとも13点以上含まれていることがわかりました。大きさは、直径1.5~2mmと極めて微小ですが、孔があけられています。これらの多くは埋蔵中に劣化し、周囲の銅製品に由来する緑色の錆によって汚染されていましたが、一部に写真のような光沢を残すものも確認されました。

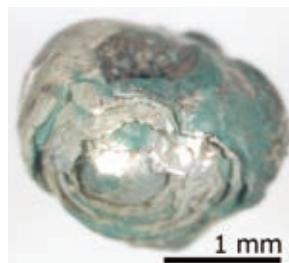
これらの小玉の材質や内部構造をあきらかにすべく、マイクロフォーカスX線CT撮影を実施したことろ、非常に細かい層構造をなすことがわかりました。さらに、蛍光X線分析およびX線回折分析で材質調査をおこなった結果、炭酸カルシウムを主体とする物質であることがあきらかとなり、これらの微細な小玉は真珠の可能性が高いと結論付けられました。

また、X線CT画像から穿孔方法についてもあきらかとなりました。孔径が0.5mmにも満たない非常に微小な孔があけられていますが、その形状は開孔部から中心に向けて細くなっており、二方向から穿孔されたことがわかります。製品の大きさはやや異なりますが、類似の方法で穿孔された真珠製の玉が正倉院宝物に残されています。

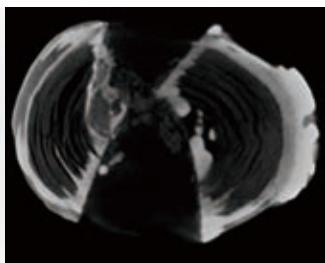
これまで、飛鳥寺塔心礎埋納物は古墳時代的な特徴が強調されてきましたが、真珠は古墳の副葬品には例外的にしか確認されていません。いっぽう、仏教において真珠は七宝の一つに数えられることもあり、今回の発見で飛鳥寺塔心礎埋納物は古墳文化とは異なる仏教施設の荘嚴具としての新たな様相を具備していたことがあきらかになりました。

現在、これら真珠小玉の貝種の同定や他の古代寺院出土品と比較研究を進めています。

(埋蔵文化財センター 田村 朋美)



真珠小玉写真



X線CT画像

講演会「英國発！グローバル 考古学」の開催

2016年9月2日に、講演会「英國発！グローバル考古学」を平城宮跡資料館講堂において開催しました。日英の文化財交流の最前線での体験談や、世界の先端をゆく英国の考古科学的研究を紹介し、日本では普段ふれることの少ない話題を提供することで、より多くの方々に両研究所の活動に関心を持っていただく機会としようという趣旨です。

去る2015年12月22日、奈良文化財研究所は、日本考古学の国際的研究の推進事業を共同して実施することを目的に、英国セインズベリー日本藝術研究所との共同研究に関する協定を締結しました(奈文研ニュースNo. 61)。同時に、2015年9月から2016年5月にかけては、同研究所の支援のもと、イギリスの各地で奈文研の研究者による講演会を5回にわたりおこないました。このように両研究所を軸として日英の学術交流が深まる中、今回の講演会は、上記の協定締結後、国内初めての公開行事となりました。

当日は松村所長による挨拶の後、セインズベリー日本藝術研究所サイモン・ケイナー考古・遺産学センター長による「加速化する日英の文化財交流」、ケンブリッジ大学ミルヤーナ・ラディヴィオイエヴィッチ研究員による「進化か革新か？考古科学が明かすユーラシア最古の冶金」、当研究所庄田研究員による「土器に残された油脂の考古生化学～日本・朝鮮半島・中国・ヨーロッパ、それぞれの新石器」と題しての講演がありました。当日は65名の方々にご来聴いただき、熱心に聞き入りつつ、時に演者たちのユーモアに笑いも沸き上がる等、盛会となりました。

(都城発掘調査部 庄田 慎矢)



ラディヴィオイエヴィッチ博士による講演の様子